

令和4年度第1回米子市総合教育会議 概要

■日時

令和4年8月22日（月）午後3時から4時20分

■場所

米子市役所本庁舎4階 402会議室

■議事

- (1) コミュニティスクールの取組状況について
 - ・本市におけるコミュニティ・スクールの取組状況
- (2) 中学校運動部活動の今後のあり方について
 - ・運動部活動の地域移行について

■出席者

市長 伊木 隆司

教育長 浦林 実

教育委員 白井 靖二

教育委員 上森 英史

教育委員 荒川 陽子

教育委員 三瓶 文乃

■出席職員

総合政策部総合政策課長 堀口 修治

総合政策部総合政策課総合戦略室長 遠藤 義英

教育委員会事務局長兼こども政策課長 松田 展雄

こども政策課担当課長補佐 木村 俊文

こども施設課長 斎木 雅徳

こども支援課長 金川 和弘

学校教育課長 西村 健吾

学校教育課課長補佐 仲倉 昭雄

学校教育課担当課長補佐 畑野 良幸

生涯学習課長 毛利 公一

生涯学習課担当課長補佐 木嶋 秋子

学校給食課課長補佐 野口 浩司

スポーツ振興課長 成田 博顕

スポーツ振興課担当課長補佐 寺本 康夫

■傍聴者数

2人

■市長あいさつ

《伊木市長》

失礼いたします。改めまして皆さんこんにちは。今日は本当にお忙しいところ、またお暑いところお集まりをいただきまして本当にありがとうございます。また日頃より、委員の皆様におかれましては、本市の教育行政の発展のために、並々ならぬご努力とご尽力をいただいておりますことに心から感謝を申し上げます。

ちょうど昨日でしたけれども、第49回がいな祭がありましたけれども、無事に終わりました。いろいろと準備の段階からですね、まだまだコロナ対策中ということもありまして、いろいろな細心の注意を払いながらの開催ではありましたが、参加してくださった方、そういった感染対策にもご協力をいただきまして、少なからぬ方々からですね、本当にありがとうございますというお言葉もいただきまして、我々としては少しほっとしているところでございます。何よりもですね、ご家族連れ、お子さん連れのご家族連れ、また若いカップルだとか、そういった若い人たちが、この街中に姿を見るのは、なかなか久しぶりの光景だったのではないかなというふうな気がいたしました。やはり特に子どもにとりましては、ひと夏の思い出というのは、いろんな方がいろんな思い出を持っていらっしゃると思いますけれども、故郷の一つの風景というものを心に焼き付ける一つの機会ではないかなと思って、もしそういう機会が提供できたのであれば、良かったのかなというふうに思っているところでございます。本当にありがとうございました。

今日の議題に入ります前に一つお知らせなんですけれども、ちょうど今日ですね、8月22日、教育支援センター「ぷらっとフォーム」が始まりまして、31日に開所式を実施することになりました。皆さんよくご存知のとおり、近年、不登校の児童生徒の人数が増えている状況があるわけですが、少しでもそういった児童生徒のですね、いわゆる第三の居場所としての役割が果たせるように、いろんな形でこの社会に出ていく、まさにプラットフォームの役割が果たせるようにですね、皆様と力を合わせて、これをうまく滑らしていきたい、そのように思っているところでございますので、引き続きまたご協力ご指導いただければというふうに思います。

そして、本日の議題につきましては、今まさに取り組んでいる話でありますし、また部活動の話につきましては、まだまだ結論が十分でない中での話でありますけれども、あえてこの段階でですね、委員の皆様とご議論をすることによりまして、問題点をぜひ共有したいという思いであります。教育委員会も非常に苦労しながら進めておりますので、ぜひそのあたりの意をくんでいただきまして、皆様の忌憚のないご意見をいただければと思いますので、今日もどうぞよろしくお願いしまして挨拶とさせていただきます。

■教育長あいさつ

《浦林教育長》

皆さんこんにちは。本日から一部の学校で始業式を迎えまして、順次、これから学校が始まっていく、そういった時期になっております。まず気になるのがコロナのことでありまして、これまでも学校と一体化して取り組んでまいりましたけれども、これからは連携をしっかりと密にしながら、子どもたちの学びを止めないということをお大切にしなければならぬと思いますし、それから豊かな教育活動を展開できるというのを、コロナの中であって

もできるだけ実施していきたいとこのように考えております。コロナに関わらず、伊木市長、あるいは教育委員の皆様方にはいつもご理解ご協力、そしてご支援をいただいております、本当に感謝したいと思いますし、また引き続きお願いをしたいという思いでいっぱいです。

それから今ちょうど伊木市長が話されたことを私も話したいと思うんですけれども、今日、支援センターがスタートしております。先ほど市長から紹介いただいたスケジュールになっておりますけれども、これまでフレンドリールームというのは、およそ学習することが、どちらかというか、求められる場所でしたけれども、その機能は保有しながらもですね、まだ、なかなか学びに至らない子どもさん方も社会との接点の一つのような場になる、そういった体験活動をして社会と触れていく、そういう居場所になるってことを一つの新たな目標としております。市長がおっしゃったことと同じですけれども、そうした中で子どもたちがいろいろな方に接したり物に触れたりして自分の生き方を一步一步見つけていく、進んでいく、そういった場所にしていきたいなというふうに思っております。引き続き皆様方のご支援を賜りたいと思います。

今日は、総合教育会議ですので、2つの議題について、この議論の中で話されたことをしっかりと教育行政に生かせるように努めていきたいと、そういった思いで臨んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。

■ 議事（1）コミュニティスクールの取組状況について

・本市におけるコミュニティ・スクールの取組状況

《事務局》

資料に沿って説明。

《伊木市長》

ただいまの説明につきまして、委員の皆様からですね、ご意見や、あるいはご質問等がございましたら、お願いしたいと思います。いかがでしょうか。

《荒川委員》

先ほどもがいな祭のお話がありましたが、企業の大きな花火で、花火を見ながら米子の子どもたちがその夏の思い出、故郷の思い出として見てるのかなというふうに思ったことと、保健所の方々は、ここに来られないぐらいずっと大変な日々を送っておられるんじゃないかなというところも思いをはせたところですが、学校の方もやっぱりコロナ対応ということで非常に忙しく対応されているように感じております。

しかし、こういうコミュニティスクールについての準備も着々と進んでいて、今、2つの中学校区で着実に実施されているということで報告があったと思います。私自身も4月頃だったんですが、たまたま一つの委員をされている方とお目にかかる機会がありまして、お話を伺ったんですが、とても目を生き生きと抱負を語ってくださって、良いスタートが切れてるなというふうに感じたところではあります。コロナが爆発的に感染したもので、人との交流がなかなか子どもたちにはできづらい。子どもたちだけではないんですけど、マスクで顔も半分見えませんし、そういった中で、こうやって地域を挙げて、学校を盛り上げていくのと、一緒に子どもを育てるというのは非常に大切だなというふうに思っております。しっかりこの先も予定ありきではないと思うんですが、まだ未設置の学校で準備会がこのまま進んでいったらいいなというふうに思うところなんです。肌感覚として、もう少し地域

に浸透した方がいいんじゃないかな。地域の方の理解と言いますか、関わっておられるところは十分理解をされているっていう感じはあるんですが、そうでないところにももう少し積極的に、広報なり、こういったいろんな機会が今後設けてあるようなんですけども、そういったところがさらに広がると、より一層の地域の気運も盛り上がるかなというふうに感じております。

《伊木市長》

ありがとうございます。おっしゃるとおりですね、やっぱり最終的に今、学校で一生懸命いろいろ抱えている様々な課題が、もうちょっと地域で共有されて、教育問題といえば学校だけじゃなくて、地域、あるいは家庭、社会、こういったところがそれぞれですね、役割を持ちながら次世代を育てるという目標を共有する、その理念をですね、やっぱりこれを通じて実現できるように、私としても教育委員会に対して必要なことはさせていただきたいというふうに思っております。

《白井委員》

コミュニティスクールの理念と言いますか、地域で子どもと一緒に学校と育てていくということが実を結び、子どもたちの人間形成の中で本当に大きな役割が果たせるものになっていくというふうに期待をするものです。その素地は、どこの中学校区にもあると思っていて、県の方が実施しています、もう20年以上前から最初はモデル的にスタートした「わくわく鳥取」という事業、中学校2年生が地域の職場に出かけて行って職場体験をすると、今はキャリア教育という看板の方がすごく強く、色濃く出ているんですけども、スタート当初は、キャッチフレーズが地域の子どもは地域で育てるというキャッチフレーズで、地元の大人の社会に子どもたちを送り出すことによって顔繋ぎができて、普段から通り過がっている大人と子どもが、それをきっかけに挨拶をしたり、ちょっとしたことで声を掛け合ったりとか、そういったことを目的として、そして大人が地域の子どもたちを見守ってくれるということでスタートしたんですけども、今、これが多分どこの中学校でも、中学2年生が体験する活動だと思えます。ですので、ぜひまたそういったものをコミュニティスクールの中で再認識しながら、その職場開拓に、例えば学校運営協議会が更に携わって、もっと自分たちで開拓しようとか、あるいは逆に、これからスタートされる場所は、そういったお世話になってる事業所さんからも委員をお願いしたりだとか、そういうことをやっていくと、地域の子どもを育てようという皆さんの気運が少しでも高まっていくんじゃないかなというふうに期待をしているところです。

《伊木市長》

はい。ありがとうございます。おっしゃるとおり、職場体験は、コミュニティスクールの一種ですよ。まず職業体験をさせようという学校のプログラムとして、地域が一肌脱ぐっていう部分もありますし、白井委員が言われたように、当初の一つの目標であった、地域とのいろんなコミュニケーション、やりとりをしていく、地域で子どもを育てるという理念、これは職場体験の中にも確かに入ってるなというふうに思います。こういうのも一つの例として、取り込んでもいいのかもわかりませんが、コミュニティスクールの一つのメニューの中にですね、もうすでにやってることではあるんですけども、理念がやっぱり一致するものについては取り込んでいくという考え方があっていいと思います。白井委員が言われたことに、僕もすごく賛同するのは、たまたま昨日、がいな祭で、こども万灯っていうのを地域でやってくださってる場所があって、応援してるのはもちろん地域の大人たちなんですけども、万灯は企業連というのが非常に強くてですね、地域の方のみならず、その地域にある企業の方が

出て行って教えてるっていうことも聞いております。つまりその子どもたちにとっては自分たちの住む地区、地域にこういう働く場があるんだなっていうのを一つ意識できる場面でもあるなと思います。そうすると、いざ就職をする年頃になってですね、送られてきた大企業のパンフレットだけ見て決めるんじゃなくて、子どもの頃から知ってるあの企業も選択肢に入れようかなっていうようなことができるんじゃないかなと思ってですね、その辺りもちょっと私は応援をしてるとこなんです。ということもございます。ありがとうございました。

《三瓶委員》

私もがいな祭の話から、ちょっと花火は見に行けなかったんですけども、家の2階の窓からちょっとだけ見えるのと、あとYouTube配信をされていたので、見比べながら、ちょっとずれがあったので、こっちがすごく綺麗だ、もう1回見ようという感じで、二度楽しめました、ありがとうございます。

コミュニティスクールなんですけど、先ほど白井委員もおっしゃってんですけども、地域の人と子どもたちが声を掛け合うとてもいい機会だなと思っていて、子どもから大人が挨拶から始まって、ちょっとずつわかっていくうちには背が伸びたねとか、足早いねとか、子どもにとっては嬉しい。逆に大人の方も、子どもから、ボランティアに来てくださった方ありがとうございますとか、次はこういうことがしたいですと言われるとやっぱり嬉しい。そのお互いの自己肯定感っていうのをすごく高めるといふ影響力のある取り組みなのではないかなと思って期待しております。新しいことを始めるのに、まずはお互いを知って信頼関係を築くっていうのが必要だと思うんですけども、小学校では幼いということもあり、学年数も長いということもあって、ボランティアが日常的に入っている、もう既に入っているという学校が多分多いと思うんですね、あといろんなことをお手伝いしていただいたりっていう機会はたくさんあると思うんですけど、逆に中学校は、それこそ職場体験、あとは何だろうとちょっと思ったりするので、ちょっとそのボランティアの方に学校側も慣れていく、ボランティア・地域の方が学校に、お互いに慣れる時間っていうのが課題なのかなあというふうに感じていました。尚徳中学校の取組で、2年生の方が未来に誇れる尚徳をテーマに、地域の方々へ提案っていうところがあったんですけど、ディスカッション形式がとてもいいなと思って、面と向かってお話ができて、そしたらきつと帰り道に出会ったら、あの方だとか、何かこういったイメージが私の中で膨らんで、とても良い取組だなと思いました。荒川委員さんも言われていたんですけども、周知の面、やっぱり周知っていうのはすごく大事なことだと思うんですけども、なかなか関わりを持った方でない、その記事なり、言葉に興味を持ってくださらないっていうのがあると思うんですね。コミュニティスクールにもし来られた方がおられたら、小学校や中学校のホームページを見ると思うんです。淀江中学校のホームページを見てみたら、タイトル画面にドンとコミュニティスクールと書いてあって、そこを開いたら、コミュニティスクールでこういうことをしてきました、コミュニティスクールはこういうものですよみたいなページがあって、これがとてもわかりやすいなと思ったのと、地域のことなので閲覧板でコミュニティスクール新聞みたいな、何かそういった周知の仕方っていうのもあるのではないかなあって、ちょっとふと思ったりもしました。

《伊木市長》

ありがとうございます。特に最後のところですね、周知のところ、最初のとっかかりは地域のいろんな役をやっ
てらっしゃる方に運営協議会の方に入っていただく、そこが一つのきっかけになると思いますけども、更にそれを
広がりを持たせるためにも、三瓶委員がご提案された、ホームページだけでなく回覧とかですね、地域の人が
たが、関心を持って手に取るようなものにですね、こういった取組を書いて、できるだけ裾野を広げていくという

のを次のステップでやっていかなければいけないなというふうに思いますので、その辺りも、またよろしく願いいたします。

《上森委員》

このコミュニティスクールといいますと、今、コミュニティスクールという形で言葉は出てるんですが、個人的に学校との関わりというのは、自分が子どもを学校に行かせて P T A の役員をした、ちょうど 30 年ぐらい前を思い出すんですね。そうすると、その当時、学校の教科以外で P T A として子どもたちに何ができるのか、学校にどうことができるのかってことを絶えず P T A の役員会の中で話をしたのを昨日のように思い出しました。その当時、学校は学校、P T A は P T A、地域は地域というふうな縦割りっていいですかね、それぞれで役割を果たすということで垣根があったような気がいたします。そのうちに P T A の連合会等々の中からですね、学校に対して、教育委員会に対してこういうことを要望したいとか、というふうな気運が高まった時代があって、どっかいうと何対何っていうふうなことで子どもたちを育ててきたような時期が、途中あった気がします。それを通してですね、今、やっぱりこうして地域で子どもたちを育てていくかということ、垣根を取り払って学校と地域と保護者と全て企業も含めて育てていくかっていう気運がやっと高まってきたなという感じがしております。30 年かかったのかなあと思いながら、もう始まったからにはですね、この垣根を取り払った地域の子子どもたちをどう育てていくかっていうことで、手を上げてもらった尚徳中学校と淀江中学校は、本当に何もわからないところで自分たちでやってみよう、この 2 校の地域の方々は本当に素晴らしいなというふうに思っております。淀江中学校に学校訪問に行ったときにコミュニティスクールにどういところを回ったよというような記事が廊下等々に貼ってあって、委員さんにもちょっと聞いてみたんですけど、やっぱり地域で子どもたちを育てないといけないと、今回やったことに関してはすごく良かったと、地域のひとと地域の子もなんだけども、本当に子どもと地域の人が直接回ることによって、コミュニケーションをとって話ができたっていうふうなことも言っておられて、次は何をしようかな、地域の防災について今度は考えてるよっていうふうな気運がどうも高まってきているようです。責任等々をはっきりさせながらですね、地域と学校といろんな方がやっぱり中心となって、一歩先を淀江中学校区、そして尚徳中学校区がされたわけですので、やっぱりそういうところもしっかりとまた応援をしながら、最後は令和 6 年ですね、ちょっとこの辺がもう少し早くなってくれればいいなというふうな気持ちはしますが、その地域地域にそれぞれの事情があると思うんですが、他の委員さんも言われたように、やっぱり皆がこれに上からさせられてる感ではなくて、自分たちがどうやって地域の子を育てていくか、自分が P T A で、自分の子どもを育てるような気持ちになって地域の方が子どもたちを見守ってくれるような、こうしたコミュニティスクールの会議にしてもらえれば、それをそういうふうにしていくのが、やっぱり我々で、会議を主催をする教育委員会事務局も含めて私たちの責任じゃないかなあというふうに思っております。

がいな祭のことになるんですが、がいな祭も 30 代の頃、20 回大会のときに役員をして、本当に地域のひとと子どもたちを交えて、新しい万灯であるとか、万灯だけじゃなくてがいな太鼓のこども連があったり、そうした役員の人たちは本当に一生懸命、この地域の子もたちに万灯を教えたり太鼓を教えたりって各地域がございませう。それは地域地域で違いますがそういう方も含めて、そういうコミュニティスクール、地域で育てるとい土壤というのは、米子には、分断されて、各ところにはあると思うんですが、そういうことが一緒になってですね、地域の子もたち、企業も含めてこれから先、このコミュニティスクール設置がますます良い方向になればなあというふうに思っております。

《伊木市長》

ありがとうございます。上森委員さんのご指摘、大変ありがたいと思います。いろいろな芽がいろんなところで本来はあるし、あったんだということですけども、それをもう1回繋ぎ直すといましようか、垣根を取り払ってやっていく。これがコミュニティスクールのポイントなんだなということを変更して認識させていただきました。

従いまして、これ私の意見ですけども、全く新しいことを始めるという発想ではなく、既に地域にいろんな芽が、芽というか既にやっていることもあるし、芽として出ているものもあるので、それをこうした協議会が拾い上げて、うまく調整していく。もうそれである程度十分ですね、これは形は作れると思いますので、令和5年度以降は、各学校はまだ未定で、できるところからという意味だと認識してますけども、できるところからですね、ぜひ進めていただければというふうに思いますし、重ねて申し上げたいのは、もともとやっぱりもう一つ、学校の先生方ですね、教員のいわゆる多忙感の解消っていうのは、一つ大きなテーマとしてありますので、学校側からですね、こういう仕事は外に出せないかとか、コミュニティスクールに任せられないかとか、そういうものがあって全然問題ないとか、むしろないといけないなと思います。新しいことがどんどん積み重なっていくような取組ではなくてですね、上手く地域的に学校と調整しながら、教員の皆さんの負担軽減に繋がるような、そういうコミュニティスクールというものを、一つ目標に持ってやっていただければというふうに思います。

《浦林教育長》

今、米子市の進み具合を話していただいたんですけども、中学校での特徴、地域の事情によっていろいろな形はあっていいんだろうなと思っています。それが淀江中校区は一つのコミュニティスクール、尚徳中学校は学校ごと、そういった形をとっております。これからもその地域の実情をしっかりと踏まえた、納得いく形にしていければというのがまず第一です。それから今、校長に話をしているのは、中学校区、とりあえず中学校区ごとにどういう子どもを育てていくかという目標を、今までもあるんですけども、もう一度このコミュニティスクールというものを導入していくにあたって、どういう子どもも育てるか、もう1回、1から話をしてもらえないかということをおっしゃっております。といいますのは、上森委員からも話があったんですけど、地域でどんな子どもを育てたいのかということ、必ず地域と話し合う場面で、そこが学校がしっかりしたものが出せないようではですね、地域との話し合いもなかなか充実したものになりにくいだろうというのが一つ思うところです。で、もう一つスタートすると、スタートしてよかったという形になるんですけども、そのまま放っておくとですね、だんだん形骸化してですね、やるのが目的になる、残念な組織になってしまはいけないというのを強く思っておりまして、導入してないところには頑張って進めていただくんですけども、スタートしたところにも適切な、そういった形骸化したりとかマンネリ化するようなことではなくて、そういったことを我々の方が一緒になって考えていくような刺激もやはり必要だろうというのが、もうちょっと先になると思うんですけども、これは忘れてはいけないというふうに思っております。それから全地域への理解とか浸透が、やはりまだまだ不十分という皆様のご意見だったというふうにお受け止めておりますし、私もそれは否めないところもあるなと思っております。現在は、こういう活動しましたということを出すのがやっとだとは思いますが、やはり地域が待っておられるのは、そういう活動してこんな子どもになってますよとかですね、こんなことができていきますよという、もうちょっと小学生、中学生を過ぎた部分で、どういった地域への貢献というようなものが芽を出してくるのかっていうあたりをもっともっと育てていく、そして知っていただくということも、これも先の話になってくるのかもしれないんですけども、でもそういった意識でみて

その先を迎えるのと、何も考えずにみるのとは違うと思うんで、そういったことがやっぱり地域と学校が一緒になって子どもを育ててよかったですねというような喜びに繋がる、そこをゴールに目指していきたいと思っております。その以前に、まだ知ってもらってないというのが非常にその通りだと思いますので、様々な手段、ホームページですとか、回覧板等のご提案をいただきました、あらゆる手段を通じて多くの人に知っていただきたい、何もこの制度、非常に新しい制度なもので、制度自体は、こんなことがこれまでなかったことなので、聞かれてもそんなことはないじゃないか、学校は学校がするのではないかみたいなのがどうしてもあるので、粘り強くやっていかなきゃいけないなというふうに思います。

それからこれもいろいろな意見が出たんですけども、今まであったものも十分使えるんじゃないかというのがご意見がありました。私もそう思っております。全部をリニューアルするという、新しく導入するのではなくて、これまでやってきていた地域との繋がりを、目標を明確にしてもう一度位置づけていくという作業が必要だろうと思います。本当に地域の皆さんに、ものすごく学校はお世話になっているんですけども、一つ一つが単体になっていて、こういう子どもを育てるためのこれなんだよっていうところが少し表に出にくい、交通安全指導するんだったら交通安全をすりゃいいでしょっていう、そういうとこじゃなくて育てたい子ども像に合わせた交通安全指導とかっていうのもあるだろうと思うんです。ですからそういった様々な活動を、その学校の目標に向けて一本化していく、そしてこれまでやっていた素晴らしい活動は、そのまま位置づけを少し変えて実施する、こういったことが学校にも大きな負担もないと思いますし、地域にも納得していただけるんじゃないかと思っております。

それからコミュニティスクールのことだけじゃなくて、防災とか福祉も、地域の担い手不足が進んでおるといことは、どこのところでも聞いているところで、米子市はここに力を入れてやっていきたいと市長もお思いだと思うんですけども、我々は教育委員会だからコミュニティスクールのことだけだという姿勢で地域で臨むとですね、これはもうまったくもって相手にもしてもらえない、やはりいろいろな地域の課題を解決する様々なものの中の一つに、このコミュニティスクール、学校という問題もありますよというところで、それをどうすればうまく機能するんでしょうねっていう、我々もその幅を少し教育委員会としても幅を少し広く持った姿勢で、地域の方々に臨む、そしてまたこの市長もおられるこの総合教育会議の中で議論していくということでそういったこともなんか一緒に少しずつでも進めていくっていうことが大事なことなのかなというようなことを思っております。以上です。

《荒川委員》

コロナでこの2年間なかなかP T Aの方の活動、地域の方の活動ができづらかったと思うんですが、地域の人としては、その先ほど市長さんおっしゃったように、学校からこれをしてほしいっていう声を待っている状況ではあるので、声かけしていただいたらいつでもいけるよっていう方が、その地域地域におられると思うので、そういう声かけを楽しみに待ちたいと思います。

《伊木市長》

そういうご意見をいただきましたので、ぜひそのあたりをご配慮いただければと思います。そうしますと、このコミュニティスクールにつきましても議論につきましては以上とさせていただきます、また、出された意見につきましては事務局の方で、できるところから検討していただくようお願いいたします。

■ 議事（２） 中学校運動部活動の今後のあり方について
・運動部活動の地域移行について

《事務局》

資料に沿って説明。

《伊木市長》

付け加えて申し上げますと、これ文化部もほぼ同じ提言が出てますね、これはね。ですから運動部のみならずですね、吹奏楽部をはじめとする文化部の同じ提言が出ているところをお伝えさせていただきたいと思いますし、それと私の考えで言うと、そもそも今回、6月にスポーツ庁の方からこうした地域移行への提言というのが出ましたけれども、既にですね、中学校の部活については、もういろんな形ができてまして、例えばうちの子はサッカーをやっていたけども、クラブチームが存在しています。しっかり頑張りたい子は、クラブチームとかですね、そういう流れができていたり、もう学年によってはですね、全然中学校の部活動に参加しない学年があったり、それ多くは、サッカーする子はクラブに行ったり、その辺がもうなかなか運営上、学校の部活動なかなか厳しいものがあるなというのは、認識をしておりました。もちろんこれは部活の種類ってどうか、種目といえますか、これによってそうしたクラブチームがあるところは、まだいい、そういうやり方が一つ出来ているんですけども、そうでないところは、やっぱり先生たちの負担という部分もあるということですし、さらに聞いてみますと、先生たちの中にも自分は部活をしたんだという考えの先生もいらっしゃる。だから、新聞で伝えられている一律にですね、働き方改革の中でやめたいんだという意見ばかりではないということもありまして、実にこれはですね、非常に多種多様な考え方・意見、あるいは道筋があるなということで、今日、何かこの場で結論を出そうということで、この議題を取り上げたのではなくてですね、こういういろんな論点があるところをぜひですね、委員の皆様にも共有させていただいて、そしてこれからの議論を持っていただけたら、もちろんご意見をいただきたいと思いますが、いただけたらなというふうにして、今回、私の方からお願いして議題にさせていただきました。それでは委員の皆様から、ご意見あるいはご質問がございましたら忌憚のないところでいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

《白井委員》

とても悩ましい課題だと思っています。私もいろんな資料等、あるいは報道等を見ながら、はてなマークがいっぱいいつてるんですけど、その中でも一番気になっているのが、もし事務局の方等でも知見がございましたらちょっと教えていただきたいんですけども、国が目指そうとしているのは、学校で今、行っている部活動に求められているものを地域にも求めていくのか、それともそこはある程度割り切って、これまでの部活動に求められているものとか機能を、多少、切り捨てても地域として、地域にそういう場、子どもに限らずですけども、大人も含めてのスポーツ、先ほど言われたようにスポーツに限らない文化的なことも出てきますけども、そういった場をそれぞれの地域で確保しながら進めていく方向に将来的に持っていこうとしているのか、どちらを目指していけばいいんだろうなことがすごく不安といいますか、はてなマークがついているところとして、その辺についてまず今の段階での空気がどういう方向なのかということがもしわかりましたら教えていただけると。

《西村学校教育課長》

まだ、国からそういった明確な方針は示されていないところです。

《伊木市長》

私からちょっとその感想といいたいでしょうか、申し上げますと、クラブチームっていうのはやはりですね、ある程度競技力の向上とか、試合に勝つということとか、場合によってはプロを目指す子なんかが行く部分がありますので、やっぱり学校の部活のような、みんなにある程度公平に機会を与えて、運動や文化活動などを通じた心身の育成といいたいでしょうか、そういった健全育成を図ろうっていうところでは必ずしもない可能性があると思います。もちろんクラブの運営方針によって、そういうことを掲げるクラブが出てくるかもしれませんが、やはりそこはその道をずっと送ってこられた、サッカーであればサッカー選手だった人とかですね、バスケならバスケットボールをやってきた人っていう方が運営されるので、そこもちょっとやっぱりですね、この地域移行を図る上で、どういうという理念を出した上でやるかというのも論点だと思っております。つまり決まってないというふうに思っております。

《白井委員》

例えば私どもが子どもの頃からのこと経緯を見てみると、この先は、やっぱりある程度多様性のことを考えると、子どもたちのニーズもですけども、実際のその学校の今の規模ですとか、実情を考えれば、今までのような部活のことだけのあり方を継承しつつ地域に移行するっていうのは難しい。全くその機能を補完したまま、地域にお願いするっていうのは、形的には難しいだろうな。なので部分的にはそうやって地域のスポーツクラブとかそういったものを受け皿がある種目であればそこに行く子どももあるだろうし、そうでない子どもたちに、それをどう活動の場を保障してやれるのかっていうことも並行しながら、いろいろな形で地域にお願いをしていく、そういう場を設けていくっていうことをバランスよく考えていかないと、成り立っていかないのかなってうすら思っています。今でさえ少子化で学校の規模が小さくなっていくと、サッカーをしたい子、野球をしたい子、バスケをしたい子、バレーをしたい子、いろいろいるのに、どれかの部活は作ろうにも作れないという状況、試合に出たくても出られない状況がある中で、今の中学校体育連盟等の大会の運営も含めて、今のままではなかなかもう立ちゆかないということも出てきますので、そこが難しい。どうやったらできるだろうなあとって頭を悩ませています。

《伊木市長》

ありがとうございます。言われるとおりですね、最初のご質問の部活をどういう理念でやるかというのはちょっと別にして、決まっていることが実はあって、それは言われたとおり、もう子どもの数が減っているという前提なんですね、これはもう間違いなくて、今後大きく反転するかって、ちょっとそれは見込みにくい、今のところですね。そうすると、今どんどん減っている人数の中でこれを考えていかなければいけないというのは、その通りだというふうに思いますし、もう一つはかつてのように人気スポーツがバーンとあって、大体チームスポーツなんですけども、そこにたくさん人数がいるかっていう構図は、今、すでに全くなくて、いろんなスポーツがそれぞれに頑張っている、多種多様な取組がある。もう部活動という枠組みでは、対応でききれていない部分、例えばスケボーがあり

ますけども、なかなか学校でやろう、部活でやろうかっていうとなかなかそれは難しいわけですけど、今ではそういう種目も非常に頑張っているんですけども、そういう多種多様なスポーツ、あるいは文化活動を子どもたちにどういうふうに味わってもらおうのか、体験してもらおうのか、上手くなってもらうのか、そういう視点は確かに委員が言われるように多様性という意味では、スポーツや文化の多様性という意味では、考えなきゃいけない論点ということだと思います。もちろん結論を今、私も持ってるわけじゃありませんけども、その辺は一つ前提だなというところ。

《荒川委員》

学校の計画訪問で学校に行くんですけども、今年の計画訪問である先生が子どもたちに向かって自分が中学校のとき、土日にも部活動を一生懸命指導してくださった先生があって、その先生みたいになりたくて自分は教師になったんだよっていうことを、授業中子どもたちにおっしゃっていました。計画訪問では学校教育課の主事の方もたくさん一緒に出かけるんですけども、その中に今日おられて、僕は嬉しいというお話をされてました。そういった意味でも中学校での部活動ですとか、その子どもたちの将来、大きな人生の何かのきっかけ作りであったり、めぐりあいが人の人生を左右するようなことさえあるんだな、そこで活躍できるお子さんもたくさんおられる一方で、先ほど少しお話がありましたけども、スポーツする以上勝ちたいという思いもあって、肯定感、自己肯定感を育むと同時に、真逆の経験をする可能性も部活動の中にあるのかなというふうに日々感じているんですけども、今のところやっぱりその義務教育、学校教育の一環ということであれば、1人1人が主人公であってほしいなという思いがあります。ただ先ほどの難しい白井委員がおっしゃったテーマに関しては、例えば学校教育から切り離すのであれば、それなりに切り離す側も覚悟が要るんじゃないかなっていうふうに思うんです。すぐには結論は、もちろん出ないんですけども、今の時点では、少なくとも週末の部活動を何年以内にこしましょってということだと思うんですが、例えば平日の指導と、週末の指導が違わないようにきちんとすり合わせていく、子どもたちが戸惑うことがないように、そういう指導方法等も一律にしていきたいと思いますし、また地域から指導に入っていただくことができたのであれば、その方が、困られたときの相談窓口がきちんとどこかに設けてあるとか、いろんな課題がたくさんあると思うので、しっかりと準備をして、子どもたちが困らないようにっていうのを大事に考えたいなというふうに思っています。米子市として何を大切に思って、これから準備していくのかっていうところが、とても重要になるかなというふうに感じています。

《伊木市長》

ありがとうございます、今、荒川委員が言われたようにですね、学校の先生の中に、やっぱり自分は部活動の指導をしたいんだというふうに思われる先生の気持ちをね、気持ちというかそれをどういうふうに尊重し、活かしていくのかっていうのも一つの論点ではないかと思います。完全に地域移行なんだ、切り離すんだということでもいいのか、それともそうした先生がいらっしゃる場合については、何かそうした部分を残しながら運営する方法がないのか、それも検討の論点の一つだと思います。はい。まさに言われたような先生がいらっしゃるのは、これはやっぱり素晴らしいこと、僕も素晴らしいことだとも思いますけども、一方で昨今の新聞の論調見ると、サービスが残業していけないような感じの論調が非常に目立つもんですから、そういう先生が、むしろ批判されないように自由意志でやっていると批判されないようにするのも一つだと思いますし、逆に強制があってもいけないという、その辺の運営をどういうふうにするかは大きな論点の一つだろうというふうに思います。

《浦林教育長》

これはモデル地域というのがあって、様々な地域で全国で実施されてるんですけども、最初は教員がやらないうという前提だったんですけども、あの研修部兼業っていうやり方がある、その研修部兼業、例えば教員だけ、家の家業があって、それをやっている、そういう人があった場合ですけど、そういったことは法令で認められていて、今の流れでは、さっき市長がおっしゃったような、後ろの辺にもそういうのがいっぱいありますけれども、それをするために言ったとは言いきりすぎでしょうけど、そういう人もいますけれども、そういった方のその熱意とか思いは経常兼業の中でクリアできるようには、思います。ただ実態的にその人の労働時間は減ったのかと聞けばですね、何も変わってないということが、今、課題になっているというふうに認識しております。ですから土曜日、日曜日出て、前の部活をしていたときと名前が違っただけで同じことをやっているということが一つ問題視されつつあると、そんな状況です。まだ結論は出ておりません。

《上森委員》

スポーツ庁が今年の6月にこういう提言をされたわけですけど、まだ中身っていうのは全然見えてこない中で、市長からこれを議題にして、米子市の部活も含めたスポーツ振興をどうしていくかというふうなことで、今日は会議を持っていただいたというふうに認識はしておりますが、多分、今年、これをスポーツ庁が提言を出されたということになると、来年度から3ヶ年でこれを移行していくというふうなことが部活動の土日を含めて、段階的に移行していくということに対して、もう少し具体的な文言といいますか出てこようかと思えます。ただ、それはただ単に出てくるんじゃないって、予算もつけた形でない、僕はおかしいなというふうに思っております。ただ単にボランティアで部活を社会の人が見てくれる、そんなのは1回2回であれば、それは可能なことではあると思うんですが、これを永続的に持続可能っていいますか、そういうことで続けていくということになると、指定管理者制度ではないんですけども、そういうことを多分請負ってくれるようなスポーツ団体とかNPOが必ず僕らは出てくるだろうなというふうに思っています。全国的に見ればですね新潟のサッカーチームのアルビレックスなんかはサッカーだけじゃなくて陸上とかバスケットとか、チアガール等々の部門を作って地域のスポーツに貢献できるような、そういう組織になっているので、そういうところに新潟が声をかければ、多分それは、その部門に関して上手いことだろうなというふうに思っています。プロ野球で言えば、DeNAなんかは、陸上とかそういう自分と得意とするスポーツに関しての組織を作って地域で、そういうことができるような団体にはなってます。果たしてこの地域でそういうことができる、ガイナレも多少、そういうことはあると思うんですが、そういうところが手を挙げてくれるか、スサノオマジックにしてもプロ集団であるので、地域貢献をスポーツどうしていくかということは、理念の方に書いてあるので、民間が入ってくるっていうのは、そうそう難しいことではないんじゃないかなと思います。もしそれが入ってきたときに、学校の中のクラブ活動を、中体連であったりとか、クラブチーム、それをどういうふうに全体をまとめていっていかうかということ、やっぱり今から、この場面ではこういうふうにした方がいいってことをしっかりと議論をする、第1回目この会議だろうと思います。

事務局にお願いしたいのは、そういうスポーツ庁の動き等々を早めに、予算が多分ついてくるだろうと思います。その予算をどういうふうにするのか、あと学校のクラブの活動の支援に対して、民間はどのように関わっていくのか、それに対してどんないろんな問題点、課題が出てくるのかというのを早め早めにやっぱりいろんなところから情報収集してもらって、米子市は例えば、トライアスロンであれば小原工さんがいるわけですから、オリン

ピック選手がいるNPOを作っているっていうのはそこしかない。そうした地域に特徴があるスポーツを中心としてもいいですし、いろんな方面で多種多様な、持続可能な地域の子もたちに、学校のクラブ活動としてもいいだろうと思いますし、スポーツ少年団でもいい、いろんなところでそういう、どこを選択してもできるっていうふうなことを絶えず考えて、これから考えてもらっとく方がいいかな。

人数が少ないところではもう学校で合同で野球の大会も出たりだとか、人口が少ない剣道なんかにしてもどっかの学校と一緒に中体連に出たりとかというふうになってきています。その辺は学校の先生方も含めて、また議論をしていかないと、なんかそんなもう、学校の先生が投げたから地域はしないといけないなんていうことにならない、一緒になって、先生も、地域も、そしてそうしたNPOも含めたクラブチームは必ずや手を挙げてくるんだろうと思いますんで、今からしっかりとその受け皿を準備してほしいなというふうに思っております。

《伊木市長》

ありがとうございます。全くおっしゃる通りだと思います。ヨーロッパの方は、部活ってのはなくて、ほぼクラブ活動、クラブチームで、地域にあるクラブチームがいろんなスポーツを担い、その中心がサッカーだったりするわけですけども、サッカーのトッププロのチームで稼いだ入場料収入などを上手く還元しながら回してるっていうのをよく聞かせていただきます。新潟アルビレックスなどは、おそらくそうしたモデルを取り入れて、日本でもそれをやったところでは本当に先進的だなあというふうに思います。従いましてこの地域でも、そうしたスポーツクラブが、一つの種目のみならず、いくつかの種目を教えられるような機能を持ってですね、NPO 法人なのかちょっとその形態はともかくとして、やる形というのは、一つ選択肢として考えなければいけない。ただ行った先に必ず運営費の問題、指導して下さる指導員の問題、報酬の問題、これが出てきますので、それを何らかの形で賄っていくところ。基本は受益者負担といましようか、そのクラブに行く子の家庭で支出するっていうことになるんですけども、ただ、それが最初の白井委員さんの話の部活動という理念を持っていくとするならば、その受益者負担が十分に負担できない家庭に対する配慮、これを組み合わせた上でのクラブチーム運営という形を考えなければいけないというのも一つ大きな論点だと思います。昨日か一昨日の新聞で、スポーツ庁の概算要求が80億っていうのが出てましてですね、これ全国ですけども、そういう地域移行するための費用としてですね、80億を要求したっていうような話が出てました。これはまだ、どうなるか全然わかりませんし、まだ概算要求の段階でさらに少なくなる可能性だってあるわけで、今、現時点における大まかな数字が出てましたけども、費用の負担の問題というのは必ずセットですね、出てきますので、それがどれぐらいになるのかということも、我々財政当局を預かる立場としてもですね、また試算が出てくれれば教えていただいた上で、検討したいと思います。

《上森委員》

全国市長会で予算を入れるように声を上げてもらえたらと思います。

《伊木市長》

実はですね、6月の全国市長会でこの話が出まして、全国市長会としての提言に織り込まれましたので、これは必ず国の文化省には届いているという認識をしております。

《三瓶委員》

このことに関して、私も頭の中がぐちゃぐちゃに混乱している感じなんですけども、私自身、育った環境っていうのが、部活が入っても入らなくてもいいっていう地域だったんですね。米子に来て、自分の子どもたちが必ずどこかの部活動に入らなければならないってなったときに、たまたま私の子どもたちは入りたいっていう部活があったからよかったんですけども、入りたい部活がないお子さん、逆に部活動以外で、外で別のスポーツをやってるお子さんとかもやっぱりいらっちゃって、でも入らなきゃいけないから時間が取られちゃうけど、両方両立するって結局またどっちもどうなっちゃうんだらうなっていうようなこともちょっと見ていながら、選べるっていうのも一つの選択肢なんじゃないのかなあとというふうに思っていて、それこそ弓ヶ浜公園のスケートパークでスケボーを一生懸命練習している方とか、そこに行けば練習ができるっていうような場所もありますし、それを学校が終わってから行くとか暗くなってできないとか、そういった選択の自由っていうか、それもうちょっと考えていっていただけないかなあとというふうに思います。

《伊木市長》

ありがとうございます。全員が選択しなきゃいけないのかということですよね。大切な論点だと思います。だから今、実態としてそういうどこにも入りたい部活がないだけだとなっていうお子さんとか、あるいはクラブチームに入っていて、学校の部活はする必要ないだっというお子さんでも、そういう人が例えば個人競技の部活をあえて選んで、休んでも迷惑がかからないような部活、陸上部とかですね、バドミントン部ですとかですね、私の子どもが通ってたところも、福生中学校は、当時、バドミントン部は、80人ぐらい部員がいて、なんでそんなに多いんだって言ったら、出てくるのはそのうちの何分の何だというような、そういうような実態がありました。ですからどうしてもやらなきゃいけないものにする今のやり方なのか、それとも、この地域移行等をきっかけとして扱いをどういうふうにするのか、これも論点の一つじゃないかなあとというふうに思います。何か放課後ね、コミュニティでも何かコミュニケーションを取れるような場に所属してもらうこと自体はいいんじゃないかなあと、ずっと1人でね、いっちゃうよりもいいんじゃないかなとは思いますが、ただ、そこにもう一つ選択肢ができるようなことにするのも一つの検討論点ではないかなというふうに思います。

《荒川委員》

選択肢があるという話で、とてもいいと思いますし、民間が入ってくるそのときの対応をどうするかっていうこと、いろんな考え方があると思いますけれども、子どもが育っていく中で、部活動がどうあるべきかっていうところを忘れずに考えたいなところです。クラブチームに入って勝ちたいっていうところを目標にやっていくのか、そうではなくて学校教育の一環として、子育てなり心身ともに健康に健やかにみたいなそういう思いで、運動部なり、文化部なり、触れる機会を設けて3年間過ごすのか、またはもう本当に、米子市として、学校として切り離してしまうのであれば先ほどのその費用の話がありましたけども、そういう負担が家庭に増えたときに、やめようとか、入らずにやっていきましょうという選択肢も増えてくる可能性があるんで、そういう選択肢を準備したときに、持続可能なスポーツに出会うのではなくて、逆に辞めてしまう選択肢も出てくるっていう、その覚悟といいますかその提供する覚悟っていうのが、やっぱりその選択肢を準備した段階で考えておく必要があるのかなというふうに思うので、やっぱりその義務教育という今の日本の社会のルールの中で、子どもにとってどれが一番いいのかっていうところをぶれずに、これから期間は短いかもしれませんが、しっかり考えていけたらなというふうに感じており

ます。

《伊木市長》

ありがとうございます。ある種一番根本のところの話ですよね。ここにいる多くの人たちが、少なからぬ人たちが、部活動でやっぱり心身鍛えてもらったっていう経験を持つという人が結構いらっしゃると思う。僕も多分その1人だと思いますけども、そこを一つ義務化を外したときにですね、選択肢があるなしも、もちろんあるんですけども、完全に学校教育から切り離れたときに、日本の教育は学校の授業だけでちゃんと今まで通り人材が輩出できるのかっていうところ、やっぱりこれも議論していただくポイントの大きな部分だろうなというふうに思います。なかなかそのところがまだまだ結論が出きなくて、それで次に進められない部分もあるのかなというふうに思いますので、ある意味そこをね、いや、いいんだと、これから変えていくんだ、日本の教育のあり方はと、学校は勉強する場だと、スポーツや文化活動するのはもうクラブ活動でやれよと、ヨーロッパみたいになってしまえば、そこはもうその一つの結論の出し方かもしれないんですけど、そこまで踏み切れるのかということころは、やはりしっかり議論した上でですね、結論を出していただきたいなというふうに思います。

《白井委員》

今のことに関連してですけども、やはり最終的な結論が、学校教育と切り離れたところでの地域移行になっていくのか、あるいはあくまでも学校教育の補完をする部分、例えば今までの部活に求められた生徒指導的な側面も含めて、できる限りその方向で地域移行を進めていくんだ、いずれにせよですね、これも最初の議題のコミュニティスクールとも全く無関係ではないと思うんですけども、例えば米子市であれば米子市として、地域にどんな形で移行しようが、少なくともこういうラインっていうか、米子の子どもはこう育てたいんだっていうことを共有しながら、やり方はいろいろあるでしょうけども、子どもを育てるという意味で、それがスポーツだろうが文化だろうがですけど、そういう意味では、学校も、それから地域の受け入れるスポーツ団体にしてもですね、同じ方向を向くといえますか、多少目的はいろいろあるでしょうが、根本は同じ方向を向くということだけを共通理解した上でこういうことが進んでいくといいなというふうに思います。

《伊木市長》

おっしゃるとおり、そこを皆さんで共通理解しておかないと、出した結論に対して、異論、反論が来てしまうのはもう目に見えているということですので、教育委員会の皆さんだけで主導して話をするのではなくて、我々もしっかりと関わりながら、この件に対応していこうというふうに思います。

《浦林教育長》

これから多くの皆さんのご意見やご理解を得ながら進めなきゃいけないというのは当然だというふうに思っておりますけれども、まず、その前提で、最後の方で議論になっておりましたけれども、義務教育における中学校の部活動の果たした大きな役割ということは、今一度やっぱり皆で理解をしなければいけないと思いますし、それに本当に自己犠牲を伴いながら頑張ってくれている中学校の教員に本当に心から感謝をまずしなければいけないというのが私の思いです。そこで本当にいろんな意味で育った子どもが大人になってというこれまでの日本が変わるのか変わらないのかっていうのを、これからいろいろ議論しないといけないんですけども、やはりこの議論

が生徒目線で議論、改革を進めなきゃいけないだろうというのが一番思うところです。いろんな立場の人の思いはあるんですけども、常にやっぱり子どものことを第一に考えて、どういうふうに育てていきたいかっていうのに、この部活をどう活用するかということだというふうに思います。これはもうずっと今後も、肝に銘じて進めてまいりたいと思っております。

それから方向性を決める一つの重要なことで、先ほど資料 1 のペーパーの学習指導要領の一番最後のところに、部活の位置づけが書いてあるんですけども、それがこれまでの日本型教育の責任感とか、連帯感とかいろんなものを培ってきたということがあったわけです。で、この学習指導要領にこれをどのように書くのか書かないのかっていうのが、今の議論だと思うんですが、そういうことがないままでこちらが議論されているというのが何かちょっと私は違和感があって、しかも 3 年というような短い期間でやれというのもちよっと何て言うんでしょうか、部活の地域移行ができて、子どもの健全育成というところに本当に繋がっていくものになるのかっていうと、すごくそこが心配です。今後も国は、この指導要領をどのようにしていくのかっていうのは、そこをベースに考えていくっていうのはどうしても我々は一番になりますので、ここは注視したいと思っております。

それから具体的にどう進めるか、いろんな問題があるのはもう私もわかるんですけども、どう進めるかっていうところで、これほどそれぞれの立場によっていろんなことが出てくるっていうのは珍しいぐらいない、新しいことだと思っています。ですから、自分の視点だけとか自分の都合だけで物を言うんですね、それは必ずやどこかと大きく衝突して、当初の子どもの健全育成というところにかない、スポーツが本当に生涯スポーツになるか、そういったところにもちよっと暗雲が立ち込めるというふうに思います。ですから、本当に多くの人が、皆さんの意見をしっかり聞いて、それを全てとは言わないまでも多くの意見をテーブルの上に出して、まずこういったものがあるよねというのをみんなが自分の立場を置いておいて理解をした上で議論に入らないと行き詰まるだろうと。ですからまず課題を洗いざらい出すっていう作業はいるんだろうというふうに思います。

その後、やはり国においてやってもらわないといけないということもたくさんあります。予算的な話もありました、先ほどの学習指導要領のこともあります、例えばスポーツ地域、スポーツ団体が担うって言っても、あるところはいいんですけどないところに勝手にやれと言われてもですね、これは国からの支援とかなければですね、到底できないというふうに思いますので、国がやっぱりやってくださなきゃいけないことは、市長会がいち早く要望書を出していただいたというのは、嬉しく思いますし、全国都市教育長会もすぐに出したところなんですけれども、このあたりを国にしっかりみんなで力を合わせて要望していくということ、それからもう一つは、やはり本市における課題、どういうふうな部活を運営していくとか、現実的にできるのかとか、どういった参加体制とか、いろんなことがこれから出てくると思うので、国においてやっていただくことと、市においてやることを上手にテーブルの上に出した課題の中から分けていくっていうことを進めていきたいなというふうに思います。

最後になるんですけども、全員参加云々とか、いろんな課題はあるんですけども、例えば部活があるからこそ、そのスポーツに出会って人生が変わった子どもとか、集団でやることによって見方や考え方が変わった子どもがたくさんいた中で、やりたい人だけがやりたいスポーツをやるということで本当に日本の国がそういったことでうまく回るのか、特にこの日本の文化が継承されていくのかっていうことには、かなり危惧をしております、私は連帯感とか責任感とか、やればできる達成感とか、そういうものをやっぱり、何とか、この地域移行という中でもですね、子どもたちに獲得させられるようなことを、それが子どもの人間性の育成、スポーツはできるんだけどっていうことではなくって、スポーツを通して人として育てるっていう米子市でなければならぬというふうに思っております。そういったものを目指して。これは、教育委員会だけで話していただくと明かかない部分がたく

さんありますので、ぜひ市長にもいろいろご意見頂戴したり、いろいろ話し合う中で、確かな方向性を見出し
ていければなというふうに思っております。引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

《伊木市長》

はい。ありがとうございます。ポイントの論点は今日の議論の中でですね、最後の教育長のコメントも含め
て、結構出たんじゃないかなというふうに思ひます。もちろん、結論が出てないことばかりではありますけれど、
大事な論点が皆様の各ご意見から、ある程度揃ったんじゃないかなと思ひます。従ひまして、今日の議論を
踏まえてですね、論点整理をしていただひて、どの話から先にちゃんと議論を済ましておくべきかなどですね、議
論の優先順位なども考へていただひて、この議論を我々としてもしっかりとやり切りたいと思ひます。

今すでに揺れてる状態が、中学校の部活動あると思ひますので、米子市としてもこれは国の動きも
見つつありますけれど、きちんと責任を持ってですね、議論の行く末を見守る、そしてその出た結論に対して
ですね、我々としてもしっかり取り組みたいというふうに思ひます。

■その他

《伊木市長》

用意しました議題は以上となりますが、せつかくの機会でございます。多少、時間がありますので、皆さんか
ら、もしあればなんなりと言ひていただければと思ひます。

《荒川委員》

公園の遊具について、楽しそうな遊具が増えてきて喜んでるんですが、インクルーシブの遊具というのがあ
って、自分の知ってる遊具とは形が違ったりするんですが、そういった導入もまた今後検討していただけると
嬉しいと思ひます。

《伊木市長》

実はですね、私もそうあるべきだと思ひて調べたところ、世田谷区がですね、現時点においていろいろ先進
的に取り組んでいるってことがわかったんですが、驚いたことに、世田谷区がどこを参考にしたかっていうと、米
子の弓ヶ浜公園だった。これはちょっと私も不勉強で反省いたしましたけれども、米子の弓ヶ浜公園の例えば
ブランコとかは落ちないようにですね、背中を覆うような形で、普通のブランコは、足だけで乗りますけども足と
手だけありますけども、します。座った場合はお尻ですけども、何点かちゃんと支える遊具になってしまひてです
ね、いわゆるユニバーサル公園を目指して作った走りだったということがわかりました。従ひまして、ただ、更に後
からやったところは、より良い良いものをね、どんどん作ってますので、せつかくご意見をいただきましたから、次、
例えば改修するときなどですね、よりユニバーサルに、どんな子でも遊べるような公園のしつらえを整えていき
たいと思ひます。

《上森委員》

城山の石垣の照明が確か明後日が撤去ですよ。それこそ正月に最強の城ということで取り上げてもらっ

て、ライトアップ等々もいろんなボランティアの人たち、草刈りも含めて、今、本当に整備をされて、駐車場も綺麗にさせていただいて、あと石垣が見えるようにして、それこそ二の丸ののどころの大きな木を切ってもらって、全体が見えるようにしていただきました。今度あそこは公園化になってですね、作るだけではなくて、それを使いたいような地域のイベントであるとか、使い方も含めて、多分、事務局の方も文化振興課が考えているところだろうと思います。しっかりとまたその辺を後押しをしていただいて、この際 10 月にはダイヤモンド大山がある、PR していただきながら、ますますこの米子の宝である城の城跡を守ることにご尽力していただければなというふうに思います。よろしくお願いします。

《伊木市長》

はい、ありがとうございます。言われるようにですね、ダイヤモンド大山も今度 10 月にきますし、我々としては本当にそうした資源を生かしてですね、やっぱり最終的には誘客、お客さんがたくさん来てくれるような、今度、ダイヤモンド大山は 10 月の 20 日前後になるわけですけども、前回の 2 月の 20 日前後は、ずっと曇りと雨で、ほぼ見えなかったということもあります。ですので、観光に生かすためにはピンポイントな誘い方、誘客の仕方ではなくてですね、もう少し広く、米子の街自体を PR しつつ、その中の一つにダイヤモンド大山があるというような誘客の仕方をして、つまり、仮に見られなかったとしても残念とかいうことじゃなくて、それはそれとして楽しめたと言ってもらえるような観光誘客というものですね、目指したいと思います。周辺のホテルの皆さんやあるいは皆生温泉なんかの皆さんと一緒に、10 月、どこにいつ来てもですね、楽しめる米子っていうのをテーマにしようよ、その中にダイヤモンド大山もあるから、その日はもし良かったら見に来ないかやというような誘い方をしっかりとしていきたいと思います。もちろん、見せる部分もですね、ダイヤモンド大山を前面に出して、写真なんかは誘客をさせていただきますけども、面で点じゃなくて面ですね、誘えるような観光を目指したいと思っています。

《上森委員》

昨日、それこそ花火を上から見下ろすたくさんの人が、私も昨日は見なかったですが、過去に何回か見たことあるんですが、雲一つない、そして風もあまりない中に花火が打ちあがるのを見て素晴らしいなと。昨日は特に雲がなくて空気が澄んでたので、星がすごく綺麗に見えてですね。多分、光がない城山の上からだったら、天の川も見えたんじゃないかなというぐらい、会社の屋根の上に上がって、花火を見ながら、夜空を見上げてですね、そういうこともいろんな面で城跡から見える 360 度のパノラマ、上を見上げれば星が降ってくるような素晴らしい場所でもあります。これも含めて PR をしたいなと思います。

《伊木市長》

ありがとうございます。それでは皆さん、よろしいでしょうか。私は司会を降りさせていただきます。